

新しい時代の幕開けを告げる最高の文化祭

11月16日（土）、この日、地域と一体となった「大野原ふるさと文化祭」を実施しました。数々の目玉演目がありましたが、中学生の劇「高原の風 秋の囁き 2019」は、カフカの『変身』を想起させる内容で、小学校低学年の子ども達もステージで繰り広げられる〈物語〉を食い入るように見入っていました。勉強に疲れた主人公が「虫に生まれればよかった」とつぶやき、居眠りから覚めるとハエになっていたというストーリーで、命の重さと相手を大切に思う心を太田校長が書き上げたオリジナルの脚本で描き、生徒の迫真の演技に会場はかたずを飲みました。

大道芸を演じてもらった「とんとこ一座」は、県が主催する「はじめてのまなび応援事業」から派遣してもらいました。演技を終えた一座の方は、中学生の劇を観て、「本格的な劇は久しぶりに観ました。感動しました。」とほめてくださいました。大道芸自体も素晴らしいものでしたが、観客をひきつける“話術の巧みさ”をこそ、生徒たちには学んでほしいと思いました。

合奏や合唱、英語暗唱……。どれをとっても、中学生として立派に小学生をリードし、自らの文化をまた一つ高めた素晴らしい出来具合でした。写真で紹介します。

